

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2020年3月 NO.214

【もくじ】

- 2～3 『共』・『協』・『響』をキーワードに日本の明日を考える…福田善乙
- 4～5 ハイスクール漫才優勝までの軌跡…大野健誠
- 6～7 『読みたくなる文章』を書くための五つのルール…三宅香帆
- 8～9 『大崎真理子遺作』展—高知の若手作家へ—法貴信也
- 10 演劇の面白さ…川島敬三
- 11 「アンテナ」屋久島ヒッチハイク旅（前編）…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団1～2月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

「共」・「協」・「響」をキーワードに 日本の明日を考える

福田 善乙



日本の国全体の経済的豊かさを示す「国富」は、2018 年末で 3,457 兆円の膨大な額になっている。

また、日本の国内総生産（GDP）は 2018 年 548 兆円であり、アメリカ、中国に次いで、世界第 3 位のまさに経済大国である。

しかし、同時に、自らの生命を断つ自殺者数は、1998 年から 14 年間連続で 3 万人を超えており（最多は 2003 年の 3 万 4,427 人）、最近は減少しているとはいえ、2018 年は 2 万 598 人もいる。

また、文部科学省によれば、2018 年に認知されたいじめは過去最多の 54 万 3,935 件になっている。そして、小・中・高で起きている暴力行為は 7 万 2,940 件であり、不登校になっている児童・生徒は 21 万 4,800 人にのぼっている。学校から報告があった児童・生徒の自殺者は 332 人になっている。

さらに、労働の場の雇用をみても、正規雇用は 2000 年の 3,630 万人から 2018 年には 3,476 万人へ減少しているのに対して、非正規雇用は 1,273 万人から 2,120 万人へ増加し、不安定雇用が増えているのである。

また、スイスの「世界経済フォーラム」が出している男女格差報告の「ジェンダー・ギャップ指数」では、日本は 2006 年の世界 79 位から、2019 年には 153 ヶ国中 121 位へ大きく後退している。

そのためか、こどもの出生数に関わる「合計特殊出生率」も、日本は 2017 年 1.43 であり、世界 202 ヶ国中 184 位である。それゆえ、日本の人口は 2015 年 1 億 2,798 万人から、2100 年 8,453 万人へ減少すると、推計されている。

このように、日本は経済的に豊かになっているのに、非常に生きづらい世の中になっている。

なぜ、このような状態が起こったのか。

それは、①グローバル段階で、利益や生産の拡大を図るための経済的効率第一主義・成果至上主義の徹底、②勝つか敗けるかの生き残りをかけた「生存競争」の激化、③アベノミクス流の上意下達方式（付度を含めて）の一般化、のもとで、多くの国民は人と人との関係を引き裂かれて孤立し、悩み、もがいて、その疲労感のなかで、「絶望」と「不信」と「いらだち」と「あきらめ」が覆い尽くしてきたように思われる。

いわば、経済のギャンブル化が進むなかで、「まじめに、コツコツと楽しみながら学び、働き、生きる」という価値観や生き方が社会の片隅に追いやられて、多くの国民にとって「生きづらい」世の中になっているのではないか。

そういう状態だからこそ、いま「絶望」のそばに「希望」が、「不信」のそばに「信頼」が、「いらだち」のそばに「寛容」が、「あきらめ」のそばに「光＝生きる力」が、そっと寄り添っていることを、日々の現実の生活のなかで、気づいていくことが大切になっている。

この多くの国民が陥っている「閉塞感」から抜け出すためには、どうすればよいのか。

それは、これまでの価値観や生き方、経済社会システムから、新しい価値観・生き方・経済社会システムへ転換することである。

すなわち、①これまでの経済的効率・成果至上主義中心から、自然や環境を大切にし、人間が人間として豊かになり、そのことが社会全体をも豊かにする「人間的・社会的効率」中心への転換、②これまでの勝つか敗けるかの「生存競争」中心から、それぞれの人間が持つ個性や能力を、お互いに生かしあい、伸ばしあう「人間の相互発達の競争」＝「共創」中心への転換、③これまでのアベノミクス流の上意下達方式の合意形成から、それぞれの人間が持っている多様性を生かし、ワイワイガヤガヤの井戸端会議的下意上達方式の合意形成への転換、である。

この転換を進めていくキーワードはなにか。

私は、「共」・「協」・「響」がそのキーワードである、と思っている。

それは、ごくあたり前に「生きている」こと自体が、ともに生きる「共生」、力を合わせて生きる「協生」、心の琴線に触れながら生きる「響生」であるからである。

現に「働く」ことだって、ともに働く「共働」、力を合わせて働く「協働」、心の琴線に触れながら働く「響働」をしているからである。

勝つか敗れるかの生き残りをかけた「生存競争」の「競争」だって、ともにつくる「共創」、力を合わせてつくる「協創」、心の琴線に触れながらつくる「響創」へ転化させていくことが可能だからである。

「教育」の内容や意義だって、ともに育つ「共育」、力を合わせて育つ「協育」、心の琴線に触れあいながら育つ「響育」が基本だからである。

この「共」・「協」・「響」のキーワードをもとに、現実の生活の営みのなかで、「絶望」ではなく「希望」を、「不信」でなく「信頼」を、「いらだち」でなく「寛容」を、「あきらめ」でなく「光＝生きる力」を、見つけ気づき、その「希望」「信頼」「寛容」「光＝生きる力」の芽を育て、大きくしていくことである。

そして、お互いがお互いを認めあい、お互いがお互いを支えあい、お互いがお互いを必要とする世の中こそ、「本当に豊かな社会」であろう。

なお、「経済的な豊かさ」でいえば、私は「ほどほどの豊かさ」でいいのではないかとと思っている。

「ほどほどの豊かさ」とは、簡単にいえば、個人にとっても社会全体にとっても「本当に必要なものを必要なだけ生産し、本当に必要なものを必要なだけ販売し、本当に必要なものを必要なだけ消費する豊かさ」である。

いまや「量的な豊かさ」中心ではなく、「質的な豊かさ」が求められる時代である。

いずれにしても、私たちは、この「共」・「協」・「響」のキーワードをもとに、明日の日本をつくるが必要になっていると思う。

ふくだ よしお

1941年 高知市生まれ

高知短期大学名誉教授、(株)四銀地域経済研究所客員研究員。

ハイスクール漫才優勝までの軌跡

大野 健誠



僕たちは高校生の漫才日本一を決める大会「ハイスクールマンザイ2019〜H-1甲子園〜」で優勝しました。コンビ名は「セントラルドグマ」。全国から挑戦した六百八十一組の頂点に立ちました。次の目標は漫才日本一を競うM-1グランプリの優勝です。

「ネタも元氣よく百点に近かった」。八月二十五日大阪中央区のなんばグランド花月。大会の審査委員長であるオール巨人師匠に言われました。優勝は審査員の満場一致で決まりました。

セントラルドグマは三年連続、中国エリア地区大会を勝ち抜き、決勝へ。去年のM-1グランプリ優勝の霜降り明星さんもかつてそれぞれ違うコンビで出場した大会です。一見エリートコースで順調に優勝を勝ち取ったと思われがち

ですが、まったくそんなことはなく、高校一年生からの苦悩と挫折をここに綴りたいと思います。

ここからは僕（大野健誠）のエピソードです。

相方の中山裕友^{ひろと}とは中学二年生で同じクラスになって、僕たちはカラオケに行ったり、映画を見に行ったりのごく普通の友達関係でした。

中学三年生になってクラスが別々になるも、その関係は変わりませんでした。中学三年生の時、ある日の授業中、国語の発表で、友達と漫才っぽいことをしたら、先生に「それいいやん！ 今度の文化祭で発表したら？」と言われ、勢いで「わかりました！ やります！」と言ってしまいました。言ったはいいものの人前に出るなんて恥ずかしいと思い、友達に「俺はいい

からお前らが出るや、俺は監督してやるから」とかっこつけ、僕は逃げました。なんせ人前に出ることにその時は抵抗しかなかったですから（笑）。

そして僕は監督。あと友達三人つれてジャングルポケットさんのネタをコピーし、休み時間や放課後、練習していました。そしたらある日ジャングルポケットの斎藤さん役をやるはずだった野球部の子が「俺、部活あるから文化祭出れんわ」と言ってきました。文化祭まで日数もなく、もう出し物のエントリーもしていたのでキャンセルできず、ずっと練習を見てきた僕が代わりに出ることになりました。

文化祭が近づくにつれ、練習回数も多くなり、最後の方は「これおもしろいんか？ これ何がおもしろ

んやつけ？」と練習するにつれて慣れていき、自信すら失っていました。

当日、体育館は大勢の先生や生徒でいっぱいでした。「自分たちがやってきたことを信じてやるのみや」と気合を入れ、本番を迎えました。

ウケました。自分たちの声が聞こえなくなるくらいウケました。そこで初めて大勢の笑いというものを感じ、笑いをとるという快感にハマりました。

そして僕はクラスで黒板係、ならぬ、おもしろ係を作り、週に一回クラスで一発芸や、漫才や、コントなどを披露しました。最初三





人で始めたおもしろ係ですが、卒業する頃は七人にまで増えています。僕は、おもしろ係のメンバーに「卒業式の日には漫才大会をやるう」と提案しました。「今まで培ってきた笑いをみんなにぶつけよう」と。そこで僕は相方としてツッコミのセンスがあった今の相方・中山裕友を誘いました。

卒業式の日、漫才大会を開催し、僕は裕友と「中山と大野で【中野】」というコンビを組み、トリを飾り、大爆笑でそのおもしろ係は幕を閉じました。

高校生になり「M-1グランプリで優勝する」という目標を相方と立てていました。そしたらある

日、親からこんなLINEが来ていました。「M-1で優勝するより先こっちゃろ」。

ハイスクールマンザイ、その時初めてこの大会の存在を知りました。僕は真っ先に裕友に連絡しました。興奮しました。こんな大会があるのかと、こんな大会、出るしかないやろ！と、自分の力を全国で試せる！とワクワクとドキドキが止まりませんでした。

二〇一七年ハイスクールマンザイ、初めて「セントラルドグマ」として高校一年生で出場し、見事、中四国代表になりました。が、決勝のなんばグランド花月では観客の笑い声は聞こえず、聞こえるのは僕たちの笑い声のみ。完敗に終わりました。全国のレベルの高さを知りました。そこで初めて気持ちを挫きました。自分たちを初めて見る人を笑わす難しさを。今まで自分がやってきたお笑いは自分のことを知ってくれている友達や、家族しか笑わせてなかったことを。来年こそ優勝するぞ、と相方と誓った僕は高知県でお笑い芸人をしているあつかんDORAGONさんに連絡をとり、月に一回公民館



でやっていた、お笑いライブに出演させていただきました。

二〇一八年、なんばグランド花月で初めて千人の笑いというものを体験しました。震えました。でも、優勝はできませんでした。またも、レベルの違いを見せつけられました。

二〇一九年優勝するためにどうすればいいのか考えた結果、ライブの場数が足りないと考えた僕たちは長期休暇を利用して東京に武者修行に行きました。東京のいろいろなフリーお笑いライブに飛び入り参加し、観客の反応を見てネタを改良しました。それは二〇一九年決勝大会の当日の朝まであ

あでもない、こうでもないと言い合いネタを完成させました。

最後のチャンスとなった二〇一九年の大会は正直優勝以外ありませんでした。

なんばグランド花月で浴びた、あの千人の笑いにはなにもにも変えがたいです。一生浴び続けたかった。

僕たちが優勝できたのは決して僕たちだけの力ではありません。親戚や先輩芸人、親、先生、友達の支えがあったからです。みんなに恩返しできて本当によかったです。

僕たちは今年の四月から上京し、また一から日本一を目指してがんばります。必ず売れて帰ってきますので、どうかご声援よろしくお願いします。

そしてYouTubeチャンネル登録お願いします(笑)。

おおの けんせい

二〇一〇年十月一日生まれ
高知県立高知南高校在学中、中山裕友とセントラルドグマでH-1優勝。

「読みたくなる文章」を書くための 五つのルール

三宅 香帆

の五点である。

本を出版し始めて、はや数年が経とうとしている。私は二〇一七年に書評家としてはじめての著書『人生を狂わす名著50』（ライツ

社）を出版させていただいて、それから二〇一九年に三冊の本を出した。しかし普段は、本の執筆と同時にネットでブログやウェブ記事を執筆している。これまで出版した本は、いずれもネットの記事やSNSを見た編集者さんから声をかけていただいて出版することになったものばかりだ。ネットで文章を書いていると、ありがたいことにたくさん読んでもらえたり、文章を好きですと言ってくれる人がいたりして、自分の文章が「人に読んでもらえているのだな」という実感を抱くことができる。人

に読んでもらえて、そのうえで楽しんでもらえていると、なおいいのだけ。

しかし日々、本を執筆したりネットの記事を書いたりしていると、友人から「どうすれば面白い文章って書けるのか」と相談を受けることが多い。もちろん私だって日々試行錯誤している途中というかわい面白い文章を書けるぞと胸を張れるわけではないのだけど、それでも何かの参考になれば、と話すことがある。

今回は、これを読んでいるあなたが文章を書く機会があれば役に立つ（かもしれない）、私が面白い文章を書くために心掛けていること、をお伝えしたい。

私が心掛けていることは、以下

①読み手をひとり決めること

文章を書く際、脳内に「この人」って読み手をひとり決めてみる。そうするだけで、ぐっと読みやすい文章になる。なぜならこの文章を他人が読んでどうか？という視点が入るから。

この人、つてのは誰でもいい。家族でも友人でも同僚でも恋人でも。あと私がよくやるのは「〇〇歳くらいの自分」。中学生の私に読んでもらおう、と想定する。「この人に読んでもらおう」と決めて、その人のためになりそうなこと、その人に言いたいこと、その人に楽しんでもらえそうなことを、書く。ビジネスだと「マーケットを

決めておく」という話だ。これをするだけで、他人から読まれる意識がでてくる。

②キャッチーな言葉を入れること

これはとくに「ネットで書く時におすすめ」な技術だけど。「SNSでシェアする時に、その言葉を抜き出してシェアしたくなる」言葉を入れてみるのだ。

インターネットの広い海で、友達がおすすめていた記事は、自分でも読みたくなるものである。だとすれば、人に知らせたくなる記事を書く必要がある。そのとき、



大切になってくるのは、「人にわかりやすく伝わりやすい、キャッチーな言葉を入れること」だ。

どこが読み手の人に刺さるかわからないから、私もまだまだできていないことなのだけど。しかしトリアル・アンド・エラーはしてみると楽しい。キャッチーなタイトルとか、キャッチーな決め台詞とか。ちょっと意識すると文章が変わってくる、かも。

③ ありきたりな言葉で隠していないか確認すること

やっぱり、ありきたりで、どこかで見かけたような言葉は…読んで飽きるし、続きを読むと思えない。何を書くにしても、すでに誰かが言ってるようなことを書



くことは、できるだけ避けたい。というか、私がすでにどこかで読んだことがあるものを二度読むことを強要されても、嫌だと思いうろう（おそらくこれを読んでいるあなたもそうはずだ）。時間の無駄なもの！

せっかく読んでくれている人に時間の無駄使いをしてほしくない。ので、できるだけ「自分だけ」が言ってるようなことを書くこと、を意識。そうすれば自然と面白い文章になってくる。

④ できるだけ短く書くこと

これも③と同じで、読んでくさってる人に時間の無駄をさせたくないぞ、という話なのだけど。短い文章のほうが、長い文章より

りも、読みやすいのだ。当然のことなのだけど、書き手になると、途端にみんな忘れてしまう。長い文章は書くだけで達成感が生まれるので、そのまま長くしてしまいたくなるけれど。心を鬼にして、「短くできる箇所はないかな？」と探すことをおすすめする。

私も、ほうっておくと文章が長くなってしまうので（今回も長くすみません）、「できるだけ短く！」を心掛けている。一度書き終えた後、ちゃんといらない箇所を削る。短いほうが読んでもらいやすいから。

⑤ 自分が書いて楽しいと思えるものを書くこと

まず書き手が書いて楽しい！と思わないと、読んでもらう方にも楽しんでもらえないだろうと、いつも思う。

どんな題材でも、書いててなんか楽しくない、と思う時、できあがったものも納得できないものが多い。それって、書いている時に読んでいる自分がノーサインを出すから楽しくないのだろう。書くことって、基本的に楽しい。だからこそ、やっぱり楽しんで書いた。自分が楽しいと思えるものを書いてはじめて、読者にも楽しんでもらえるはずだ。

こんなことを書いておいて恐縮だが、私は昔読んだライターさんの文章に「文章を書くときのルールなんてのは、癖みたいなもので

あって、自信をもって人に語るべきではない」とあったことをよく覚えている。本当にその通りだとは思う。が、それでも、もしあなたが文章をなにかのタイミングに書きたい！と思った際、なにかの参考になればとても嬉しい。文章の書き方についてより知りたくなった時は、拙著『文芸オタクの私が教える バズる文章教室』（サンクチュアリ出版）という本を読んでもらえたら幸いだ。最後に宣伝で失礼いたしました！

みやけ かほ

一九九四年生まれ。高知県出身。文筆家、書評家。京都大学大学院人間・環境学研究科博士前期課程修了。現在は会社員の傍ら、文筆家として活動中。

著書に『人生を狂わす名著50』（ライツ社）、『文芸オタクの私が教える バズる文章教室』（サンクチュアリ出版）、『副作用あります！？ 人生おたすけ処方本』（幻冬舎）、『妄想とツッコミで読む万葉集』（大和書房）がある。

「大崎真理子遺作」展——高知の若手作家へ——

法貴 信也

高知には、大崎真理子という若い才能豊かな絵描きがありました。恐らく、地元作家に詳しい人の間でも、彼女のことは知られていないでしょう。というのも、彼女は美術大学在学中に他界しているからです。

大崎真理子は、一九九四年、高知県に生まれ、東京都江戸川区の葛西小学校に入学後、二年生の冬に土佐市の北原小学校に転校し、高校までを高知県で過ごしました。高知学芸高校在学中の二年生の時に県展に入選、高校美術展では奨励賞を受賞し、全国高等学校総合文化祭の県代表にも選ばれていました。高校を卒業すると、京都市立芸術大学の美術学部にて現役で入学し、油画（油絵）を専攻しました。その卒業制作では最も優れた作品に与えられる市長賞を受賞、鷺田清一前学長と対談をしています。その後首席で進学した同大学大学院では、京都銀行に作品が買

げられました。

学校や社会から高い評価を得て、順風満帆な学生生活を過ごしていた大崎でしたが、大学院一回生の作品展が始まった二〇一八年二月八日の朝、不慮の事故によって亡き人となってしまったのでした。

彼女はずっと身近な風景を描いていました。その絵は対象のあり方に忠実なものもありましたが、多くは想像的なものでした。専攻に入ってから初めての作品展で発表した作品は、大学の制作棟に続く坂の角に立つ樹を燃えあがるように描いた『見えるものと見えないもの』で、三回生の前期展に出品したのは学校の正門から坂を下り、アルバイトに向かうバイクからの目線で描いた『かえり道のさか道・昼』、そして同年の作品展は、文旦を取獲する実家の様子を描いた『家の庭の抜けがら』でした。四回生の大学院試験提出作品は『56号線が見える』という実家からの

光景、そして小さい頃によく行った『葛西臨海公園』であり、学部の集大成である卒業制作『見えるものと見えないもの』では、実家からの道が一般道とぶつかるT字路を描き、名誉ある市長賞を受賞しています。

これら作品の多くは、自分がいま、ここからどこかへ向かおうとする時、最初に出くわす風景を正面からとらえたものでした。

彼女は、常に自分の未来に対してひたむきでした。作品には、その高鳴る気持ちを胸に抱きつつも、一呼吸おいた瞬間に感じた期待と不安が入り交じった感情がクッキリと映り込んでいるようです。

ところで、注意深い方であれば、作品のタイトルに『見えるもの』と見えないもの』というものが二つあることに気づかれたかも知れません。これは、高校の時に出会ったノヴァーリスの言葉からの着想で、以降は通奏低音のように作品

の中で繰り返し検討されています。また、「鉄は地面から生まれて建物となり、それが錆びて土に還る」という本人の言葉が示すように、風景には人工と自然が常に併存、共存することが意識されていました。

いずれにしても、彼女の描く風景には、一見対立するように見えるもの同士が触れあっている場の力、あるいはその対立の間を縫ってつなげる循環のエネルギーが、静かながらも満ち満ちています。

絵の大きさは、25m×4mという桁外れの卒業制作が示すように、とても大きなものばかりで、そのぶん、半期全てを一作に費やすような寡作でもありました。但し、本作に取りかかるまでに取り組んだ試作やスケッチは膨大です。常にペンや水彩でスケッチをし、また風景の中で気になったモチーフは、最終サイズを意識しながら納得いくまで油彩で試作を繰り返しました。そして驚くべきは、本作に取りかかることを決めると、それと同じ大きさの試作によって全体のあり方を最終確認するという徹底ぶりです。

こうして、景色を見た時に一瞬立ち現れた感情を何度も何度も咀嚼し、それが簡単に色褪せてしま

わないところまで作品を練り上げていったのです。

「繰り返すと気持ちが萎える」

といった一般論には全く耳を貸さず、時が経っても活き活きとした感覚が伝わるどころまで造形しよう、そうやって持続的な作品を作ろうという高い意識が彼女を常に前へ前へと突き動かしていました。

その姿勢は画材や技法の追求でも変わりませんでした。キャンバスと絵具の相性、筆の違いによる掠れや含みによる効果、そして、もちろん色選び。自作したフォルダに残された呆れるほどたくさんの試作には、やはり呆れるほどたくさんさんの付箋と直接書き込まれた覚え書きがありました。

彼女は、絵を描くにはなによりも気持ちが大切であること、そして



「かえり道のさか道・昼」 2015年
194 × 324cm キャンバスに油彩



「見えるものと見えないもの」 2015年
180 × 250cm キャンバスに油彩



「56号線がみえる」 2016年
182 × 227cm キャンバスに油彩



「見えるものと見えないもの」 2017年
250 × 400cm キャンバスに油彩

て、それと同時に作品を立ち上げるためにしなければならぬ実際的なこと、この両方についてとても自覚的でした。

その大崎真理子の展覧会が、今年の三月十八日（水）から、かるぽーとで行われます。

かるぽーとは、大崎にとって特別な場所でした。京都の画廊から「ぜひ個展を」と声が掛かって、「私の初個展は、大学院を修了してから、絶対にかかるぽーとで」と頑なに譲りませんでした。思い出すのは、亡くなる四ヵ月ほど前、取り寄せた会場の図面を見ながら、将来開催する初個展について楽しそうに思いを巡らせている姿です。筆者は高知との繋がりがありませんでしたが、ご両親とお話をする中で展覧会の計画が立ち上がり

ました。京都で、ふとしたきっかけで知り合った高知在住の若手作家さんに、地元で活動している作家さんや美術関係者の方を紹介してもらいました。その内の多くの方たちが、今も力を貸して下さっています。また知り合いの学芸員さんからの紹介で、高知県立美術館に何度か伺ううちに、館からのご協力を得ることもできました。学芸高校美術部の恩師だった平田慎一先生は高校内に実行委員会を立ち上げて下さり、現役の先生方は勿論のこと、当時の同級生、美術部の仲間が、着々と展示の準備を進めてくれています。こうした皆さんの力添えのお陰でようやく展覧会が実現します。

画家としての経歴は決して豊かとはいえませんが、この展覧会で、

進学した京都で高い評価を受けながらも地元を愛してやまなかった若い作家の画業を、一人でも多くの人に知ってもらえたらと考えています。

なかでも、これから絵を描いていきたいと考えている地元の若い人たちには、ぜひ見てもらいたい。既に揺るぎない地位を確立した高知出身の画家の作品から学ぶことは限りなくたくさんあります。が、同じような環境の中に育ち、且つ世代もそう離れていない「先輩」が、一旦地元を離れた先でどれほど熱心に学び、魅力的な画家になるべく一つひとつ努力を積んでいたのかを目の当たりにする滅多にない機会だと思っております。

ひとりの作り手が描いたものとその時の感動が、絵を愛してやまない人たちと将来の作り手の記憶の中にしっかりと根をおろし、そして永く引き継がれていくことを願ってやみません。

ほうき のぶや

一九六六年 京都府生まれ
一九九三年 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了
現在 京都市立芸術大学美術学部教授

演劇の面白さ

川島 敬三

皆さん、はじめまして、川島敬三と申します。子どもの頃は、まだテレビというものが、世の中に普及していなかったのも、もちろん、わが家にもなかった。そして、演劇というものも見たことがなく、当時の本丁筋五丁目にあった日劇（なぜか、

日本劇場ではないのに、日劇）という映画館で、東映の時代劇ばかり見て、中村錦之助、大川橋蔵、大友柳太朗等の時代劇俳優に憧れていた。

脇役では、堺駿二が大好きで、当時から脇役に興味があり、二枚目が、格好良く舟に飛び乗る場面など、私なら、ずっこけて川に落ちたら爆笑を誘えるのに、と考えたりしていた。子どもの頃は、記憶力もすごく良かったので、（六十歳をすぎた頃から、セリフは憶えられなくなっています）が、殺陣は憶えただけですぐ覚えて、家に帰ってから、おもちゃの刀を使って殺陣の場面を一人で演じていた。殺陣は近衛十四郎が、なんと言ったも、一番格好良かった。

そして、十九歳で上京し、中野實・作、山口純一郎・演出の『手錠』という作品で、学校の文化祭に参加し

たのが初めての演劇経験となった。私は刑事役で、冒頭の取り調べの場面に「えらい、すまん」というセリフがあったのだが、なぜか、このセリフが会場の爆笑を誘って大うけした。その時は、わからなかったが、あとで考えると、初めてだった。他のことは何も考えず思わず夢中で、犯人にあやまっていた。会場の人も、本当に私にあやまられているように感じてくれたようだった。この時、こういうことなんだ。演技というのは、ウソを演じるのではなくて、そこで、本当を行動するものなんだということを感じた。

その後、東京では、シナリオ作家協会の教務におられた大石洋三さんという人に出会った。大石さんはシナリオでは、新藤兼人さんの弟子にあたり、高知市の姉妹都市の北見市出身で、そうか、君は高知市かと言って、私に興味を持ってくれた。この人から、シナリオや映画、アンゲラ演劇などの話しを聞き、影響を受けた。それまであまり知らなかった、黒テントや状況劇場のことも教えていただいた。

高知へ帰ってからは、まず、故・武市哲夫氏が主宰する「劇団ゆまにて」に入団し、『あすなろやくざ』『桂浜殺人事件』等の作品に出演した。そして、二十九歳くらいの頃から、故・帆足寿夫氏の主宰する「演劇センター'90」に参加。以来、帆足さんが演劇センター'90の活動を終了

するまでの三十年以上、計六十本以上の作品に出演した。翻訳物、アンゲラ風、コメディもありですが、社会性もあり、シリアスでリアルな演劇をずっとやらせていただいた。帆足さんの演出、演技指導は厳しく、妥協されることがないので、私は劇団員の中でも、最も多くのダメ出しと注文をいただいたものだ。リアルな本当の行動ができていない時には、できるまで何回も妥協することなく演技指導が続いた。「演出に言われたから、そうするのではない。台本に書いてあるから、ト書きに書かれているから、それを機械的にするのはない。おまえが思わず感じたことを、やりたくなったら、やりたくなったことをやるんだ」と。「絶対には、お前自身だ」と。「相手役によって動かされた、お前自身が、本当にやるんだ」と。このやり取りは、今も忘れず、ずっと心の中に残っている。このような、本当の行動（演技）を理解することが、お芝居の最大の面白さであるかもしれない。

現在は、演劇センター'90のメンバーだった松田明彦氏が演出する「からくり劇場」と、谷山圭一郎氏が演出する「カラクリシアター」に参加して、春秋、年二本の予定で活動している。からくり劇場は劇作家の書いた戯曲を松田明彦氏が演出し、カラクリシアターは谷山圭一郎氏がオリジナル戯曲を書き、独特の世界観で演出して、ともに蛸蔵で上演を続

け、これまでに四本ずつの作品を発表している。

その他、三十分以内の小作品を持ち寄り、個人や団体のスキルアップや交流を目的に開催する蛸蔵ラボという公演に、「からくり敬三」として、一人芝居『とも子』という作品で参加した。これは、私が子どもの頃から、憧れている夢のようなものをモチーフに、けいちゃんとも子という少年、少女の高校生くらいまでを描いた、演劇とか、戯曲とかとも言えないような、青春物語である。私も観客に見せるという感覚があまりなく、演じていて終わりのほうは、とも子が送別会で、挨拶をしているような不思議な感覚だった。その後も、私の弟子として、一緒にやっている、みほり（小松美保）と二人で、『劇団とも子』というユニット名で、『とも子』の続編的な『東京妙子』と、『お茶のしあわせ』という作品で参加している。

年齢も六十五歳となり、この三月で退職を迎えるが、九月の薬工ミュージアム『小さな星の王子様』では、出演者や障がいを持つ方のサポートをして参加しようと思っている。このような形で、参加、サポートもまた、私なりの楽しみのひとつになるだろう。

かわしま けいぞう

一九五四年 高知市出身・在住

「アンテナ」

屋久島ヒッチハイク旅(前編)



下尾 仁

周波数を合わせれば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がる。

何故だかわからないが前々から屋久島に行きたいという気持ちがあった。四十歳まで勤めていた会社を辞めた僕は、ならば四十歳記念に屋久島に行こうと思いついた。

職業訓練校に通うまでの二週間あまり、どういう交通手段で行くのがいいのか？車なのかバイクなのか？時間はまあまあある。せっかく四十歳の記念旅行だ。ヒッチハイクにしよう。中年おじさんのヒッチハイク旅の始まりだ。昔からヒッチハイクをしている人を何人か乗せたこともあるし、なんとなく出来そうなイメージがあった。とりあえず、テント・寝袋などの最低限の物を準備した。

出発の一週間前、その年に、よさこいを踊ったチームの飲み会で、来週、ヒッチハイクで屋久島に行くことを話した。すると一人の友達が面白そう、屋久島が何処にあるかわからないが僕も行きたいとの

話になった。

彼の名前は橋本君、通称「はしM」、男二人でヒッチハイクしても面白くないと思ったので同じ日に出発して、屋久島に渡るフェリー乗り場、鹿児島港まで競争しようということになった。

出発の日、午前中に職業訓練校の入学説明を終え、午後一時ぐらに高知インター近くでヒッチハイクをスタートした。スケッチブックに須崎方面と書き、立っていると五分もせず一台の車が止まった。一人目はおじさんで窪川の道の駅「あぐり窪川」まで乗せてくれた。次は、スケッチブックに宿毛方面と書き、道で三十分程待機するとシルバーの 아우ディが止まってくれた。男性一人女性二人の三人組、この三人はすごく楽しく車中は盛り上がった。宿毛まで行くけど、途中の中村で用事があり、用事が終わるまで待っていてくれればと言ってくれたが、僕はなんとなく、次に乗せてくれる人を探してみますと車を降りた。三台目はおじさんで、乗せてくれたのは

感謝だが、なんとも中途半端な所までだった。スケッチブックを掲げて四台目を待っていると、先程の 아우ディが止まり、こんな所におったがと、宿毛フェリー乗り場まで乗せてくれた。着いたのは夕方フェリー出発の時間を見ると深夜、まだまだ時間はある。その辺りをウロウロしていると、その時、宿毛で撮影していた映画『パーマネント野ばら』の撮影現場に出くわした。実は、僕はオーディションに合格し、二週間後この映画に出演することになっており、吉田大八監督と面識があった。監督に今から屋久島に行ってくださいと伝えると監督は僕の靴を指差して、同じ靴で縄文杉を見に行つたことがあるよ。と話してくれた。その時、僕は勝手に縁を感じた。その頃、はしMは、昼まで仕事をし、丁度この日に九州に行く友達に乗り、フェリー乗り場に向かっていた。何もすることなく待ち合いで横になっていたら、はしMが、下尾さんと声をかけてきた。なんとなくだが旅の始まりだと感じワクワクした。今はなき宿毛・佐伯フェリーに乗り、夜明け前に九州に着いた。右も左も、西も東もわからない土地、とりあえず夜明けまではその辺りにテントを張り、日の出を待った。空が明るんできた。僕は二日目、はしMは初めてのヒッチハイクのスタート、僕とはしMは、じゃあ鹿児島港で、と握手を交わした。一台目はなかなか乗ることが出

来なかったが、やっと乗せてくれた車のカップルがえらく僕を気に入ってくれ、佐伯から延岡まで行く予定だったらしいがなんと宮崎まで乗せてくれた。高知から足摺程の距離である。宮崎名物肉巻きおにぎりまでごちそうになった。

ここからは、大学生の娘を乗せたお母さんに、「あんだ、そんな年になって何をしてるの」と車中で延々説教されたり、桜島に長瀬剛さんのライブに行くという男性二人組に乗せてもらい長瀬を大音量で流し、三人ノリノリで歌いながら無事に鹿児島港に到着した。時刻は午後五時前、はしMに着いたよと連絡すると、はしMは、スタート地点からさほど進んでなく、今日中に着けるかどうかということ。まあそれも仕方ないかと、僕は桜島にフェリーで渡り、温泉に浸かりました。

夜十時過ぎ、はしMから連絡があり、着きました、奇跡的に鹿児島港に来る車に乗せてもらった、という。これで一緒に屋久島行きフェリーに乗れることになった。次の日、約四時間フェリーに乗り、僕たちは屋久島に上陸した。(次号に続く)

しもお ひとし

一九六九年生まれ

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

1 ～ 2 月の事業から

Kochi Art Messe Vol. 2 「高知アートメッセ」

高知の若手美術作家の作品展示と販売を行う企画展「高知アートメッセ」を、二〇二〇年一月一七日（金）～二十三日（木）、高知市文化プラザかるぽーと市民ギャラリー第一展示室で開催しました。

この事業は、これからの高知の美術文化を担う若い世代の作家の応援を目的とし、作家を多くの人に紹介する場であるとともに、単なる鑑賞だけではなく、来場者に色々な美術の楽しみ方を提案する場を目指し「美術のファン」を地域に増やしていこうという取り組みで、昨年度初めて実施し今回が二回目の開催です。対象は高知県内在住もしくは県出身の十六歳～四十歳未満の作家で、既定の

サイズ内で容易に壁面展示ができる作品であれば自由に出品できます。販売価格は作家自身が設定します。今回は四十六名の作家から油絵、日本画、粘土造



形、写真など、若い感性と意欲あふれる一〇三点が寄せられました。またそのうち二十一点の作品が売約になりました。今後本事業を通して作家と鑑賞者を結び、高知の美術文化のさらなる活性化を目指していきたいと思っています。



〈来場者のアンケートより〉

・ 作品にご自分で値をつけられた作品を見るのは興味深く面白かったです。今は作品を購入する余裕がないのですが、また沢山の作品を見てみたいです。

・ 小作品に限定した展示だと作家のこだわりや美意識が感じられ面白かったです。個人的に欲しい！応援したい！と思える作品も何点もあり満足。飾る場所があれば作品を迎えたかった！来年も開催があれば嬉しいです。

〈入場者数五五四名〉

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Culチャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円(4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで)

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

田上パル「Q学」

二〇二〇年二月一日（土）・二日（日）、

高知市文化プラザかるぽーと小ホールにて、演劇公演『田上パル「Q学」』を開催しました。本事業は一般社団法人全国モーターボート競走施行者協議会、一般財団法人地域創造の助成を受け、全国九都市ツアーの一つとして実施したものです。

上演作品「Q学」は、二〇一五年に北九州芸術劇場が企画し、演出家・田上豊氏と地元の高校生たちが「教室で見る演劇」と題して、学校の教室等での上演・鑑賞が可能な作品として創作されたものです。その翌年、長野県上田市の高校生とともに、また二〇一八年度にはプロの俳優を擁して東京・神奈川・岩手で再演され、各地で好評を受けてきました。

とある高校の表現選択科目「演劇」に集まった問題児たちの会話で物語は進んでいきます。まずこの「会話」がとにかく面白く、一気に舞台に引き込まれました。冗談や憶測が飛び交う・要領を得ない・おしゃべりが目的になり着地点を見失う、でも、高校生の時はそんな他愛もない話ばかりしていたなと自分自身と重ね、あつという間に没入させてくれます。この会話は非常にテンポが速く、高校生のリアルな一瞬を切り取ることに成功しており、それぞれの場面を緻密に練り上

げ命を吹き込み、そして疾風怒涛の舞台を作り上げる田上演劇の真骨頂を観られたと思います。

そんな瑞々しい輝きの中に、現代社会の十代が抱える（あるいは抱えさせられている）背景が見え隠れします。物語の構造が徐々に明るみになるにつれ、登場人物一人ひとりの輪郭がはつきりしてくると、もどかしい人間関係やどうにもならない社会の壁が顕わになります。そして終盤、鬱積

したものを吐き出すかのように絶叫し、その後の静寂と終演に到達する場面では、不器用で素直になれない、しかし愛すべき若者の心情をこれ以上ない表現で見せつけてくれました。八十五分という上演時間を全力疾走で走り抜けた舞台という印象であり、走り抜けるために全く無駄を削ぎ落した舞台は、ここまでエネルギーを放つのかと、今までにない感動を覚えしました。

終演後に開催した公開ワークショップでは、シアターゲームののち、グループに分かれテキストを用いた即興芝居を発表しました。脚本家、演出家、俳優の気持が一度に経験できるというこのプログラムは大いに盛り上がり、各グループ



の意外性に富んだ想像力溢れる発表に、見学の方も参加された方も演劇の魅力を感じられたと思います。

さて、高知公演を迎えるにあたって、広報では、高知の演劇関係者にインタビューを行い、動画として公開する新しい試みを行いました。

「Q学」を観劇した方や田上演劇を経験した方々三名に、見どころや魅力を語っていただき、とても説得力のある内容になりました。実際に動画を見て来場を決めてくださった方もいらつしやり、公演に向けての練度をいかに高めていくか、今後も様々な試みを行っていきたいと思います。急な依頼にも拘わらず快く出演してくださった三名に改めて格別のお礼を申し上げます。

演劇の魅力が存分に詰まった作品を、たくさん的高知の皆様にご覧いただけて、とても嬉しく思います。これから様々な芸術文化に出合える場面を創っていきます。また劇場でお会いできる日を楽しみにしています。

〈入場者数 一日：七十八名 二日：六〇名〉



高知を撮る

第35回写真コンテスト入賞作品

嫁ぐ日

(昭和51年3月21日 高知市御畳瀬)

中内 勝由

近所の人達に見守られて、お披露目をしながら結婚式へ。

毎年秋に開催される高知県芸術祭は、高知アーツプロジェクト(KAP)と言って、志のある団体、企画に優れたイベントに助成する仕組みがあり、毎年厳しい審査を通過した団体が、助成金を使って地域を巻き込んだ芸術文化活動を展開している。

本年度は十三の助成団体が、九月から十二月の期間中に県内各地で様々なイベントを仕掛け、大いに地域を盛り上げた。その成果の報告会は、毎年一月末に行われていて、今年も各団体によって、力のこもったプレゼンテーションが行われた。

採択された助成事業は、赤岡の冬の夏祭りや大豊町での音楽イベントや棚田での演劇など様々。毎年継続的に行ってパワーアップしているものあれば、全く新しい感覚でゼロから立ち上げたものもあり、それぞれに工夫を凝らしている。主催者の原動力は、住民が少なくなり高齢化が進んだ地域に、一時的にでも人に来てもらって地域の良さを知ってもらうこと。できれば、移り住んでもらうて、活気のある町に蘇らせること。

仕掛け人 + α



風俗歳時記

うな気がする。

昔は孫や地域の人に教えていた縄緬いを商店街の文化祭で教える、自主上映画に足を運ぶ、地区の自治体としてサポートするなど、それぞれの立場でできる $+\alpha$ 、これこそが文化振興の原動力になる。

(立花香)

そのためのきっかけツールが、芸術・文化という訳である。

赤岡や奈半利は、メインストーリーや古民家を使って展示や参加型の工作を行い、大勢の人を町内外から集めた。その盛り上がりの様子は、プレゼンするスタッフやパワーポイントの画像からも伺えた。最初に「こんなことをやるう」と腰を上げるのは仕掛け人。その後、どうしても必要なのは自治体の協力、住民の協力である。そうした地域の力、住民力がまだ残っているエリアでのKAPは、成功しているように感じた。

仕掛け人になることはハードルが高いかも知れないが、仕掛け人にのっかかって協力する $+\alpha$ の力なら何となくなれそう。

仕掛け人。その後、どうしても必要なのは自治体の協力、住民の協力である。そうした地域の力、住民力がまだ残っているエリアでのKAPは、成功しているように感じた。

山村誠一 ミュージックショー 祝☆還暦

山村誠一の還暦祝いにラグタイム・ブルースの巨匠山じゅんじとアコースティックギタリスト押尾コータローがやってくる!!
ラテン、ジャズ、ワールドミュージックとビートを刻み、そしてスティールパンと出会い紡いだ山村誠一60年の軌跡を音楽で振り返る珠玉のスペシャルライブ。高知での活動母体カリビアンハーツも駆けつけ賑やかにお届けします。

【日時】5月1日(金) 18:30開場 19:00開演

【会場】高知市文化プラザかるぼーと 小ホール

【料金】前売 一般3,500円 高校生以下1,500円
当日 一般4,000円 高校生以下2,000円
※全席自由(客席が満席の場合は立ち見となる場合があります)
※未就学児入場不可

お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071



第36回

写真コンテスト 「高知を撮る」 入選作品展

このコンテストでは、毎回「高知」をテーマにした写真を募集しています。

「記録写真部門」と「I LOVE 高知部門」にご応募いただきました294点の作品の中から、特選4点、準特選20点を含む入賞入選作品66点を展示します。

○記録写真部門 (平成以降の部、昭和以前の部)
○I LOVE 高知部門

高知の懐かしい風景や出来事、人々の暮らしを記録した写真や、撮影者の好きな高知を写した作品など、様々な高知の姿を是非ご覧ください。

■日時

3月17日(火)～22日(日) 10:00～17:00
※17日10時より表彰式を行います。

■会場

高知市文化プラザかるぼーと
7階市民ギャラリー・第4展示室

■入場料

無料

■お問い合わせ

高知市文化振興事業団 088-883-5071



【記録写真部門】昭和以前の部 特選
「昭和39年オリンピック東京大会 聖火リレー」 松山久生

風伯

ハズレる「天気予報」

いときでさえ、「晴れ時々曇り」ところにより雨」という予報では、予報とはいえなくなってくる。「明日は晴れ」が、翌朝には「雨」の予報に変わっていたりもする。しかもその雨は「バケツをひっくり返したような雨」ではなく、ごく普通の洗濯物が乾かないような雨である。なぜなんだろう。どうも、温暖化による海面温度の上

六、七年ほど前からだろうか、天気予報がまったく当たらない。予報のズレ方が尋常ではない。民間の予報士による「最近の異常気象にスパコンが対応できない」というような話を聞いたことがある。確かに日本近海で東から西に蛇行する「台風」などだれも予測できないだろう。でも異常気象など起こっていない

今号の表紙

土筆

谷田はるか

河原などいたる所に生える植物で春の顔という印象が強い土筆をモチーフに選びました。

(ただ はるか/
国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)

昇が予測を難しくしているようだ。海上には観測点が無く観測員もない。予想するしかないが、海面温度の上昇がどれほど雲を生成し、雨を降らせることになるのか、なかなか予測しづらいようだ。犠牲になるのは西が海の九州、次いで中国、四国地方で、東の東京あたりになると九州、四国の観測網の恩恵で明日の予報が外れる確率は少なくなる。

気象衛星「ひまわり」は一九七七年七月の第一号からいまは九号まで打ち上げられていて、現在二台が運用されている。この「ひまわり」が故障しているのではないかと、一時疑ったこともあったが、そうでもないらしい。「ひまわり八号」はこれまでの四倍の解像度があり、雲の細かい動きも観測できるらしい。二〇一六年に打ち上げられた「九号」は現在の五十倍のデータ量になるようで、再来年からの運用を首を長くして待っているしかない。

(霖)

第 72 回 高知市文化祭開幕行事



KOCHI
カル・フェス・オーフニング

筆山の ゆかいな仲間たち

筆山文化会館でそれぞれ練習している
音楽団体が“かるぽーと”に集合!

2020.
4.12 日

前売券 (小学生以上)

開場 13:30 開演 14:00

高知市文化プラザかるぽーと 大ホール

500円

※ 当日券 800 円

※ 未就学児入場無料

#0 ウエルカムステージ (ロビー演奏)

出演: MSK ジャズオーケストラ

#1 ビッグバンド・ジャズステージ

出演: ミスター・ポストマン、高知龍馬バンド、土佐スウィングメーカーズ

#2 音楽物語ステージ 作曲委嘱作品「校舎とイチョウ」

出演: 高知フライデー・ウインド・アンサンブル、高知マンドリン土曜日会、
四国二期会高知支部

#3 吹奏楽・合唱ステージ

曲目: HOLLYWOOD MILESTONES、合唱と吹奏楽のための

出演: 高知フライデー・ウインド・アンサンブル、「翼をください」など
びたあすいーと、萩町バンド、花山海、高知センター合唱団

託児サービス が無料で
ご利用いただけます。

事前にお申し込みいただくことで
コンサートの間、別室にてプロの
シッターがお子様をお預かりします。

お申し込み方法: 高知フライデー・ウインド
・アンサンブルのホームページのお申し込み
フォームよりご連絡ください。

主催: 高知市文化祭執行委員会 / 高知市文化協会 / 高知市筆山文化会館利用者協議会

主管: 公益財団法人高知市文化振興事業団 / 高知市教育委員会

後援: 高知新聞社 / NHK高知放送局 / RKC高知放送 / KUTVテレビ高知 / KSSさんさんテレビ

お問い合わせ: 公益財団法人高知市文化振興事業団 TEL: 088-883-5071

かるぽーと

検索

チケット販売

かるぽーとミュージアムショップ / 高新プレイガイド / 楽器堂 (本店・イオンモール高知店) /
アルベジオ楽器 / 高知フライデー・ウインド・アンサンブルのホームページ / 各出演団体の関係者